

# 津波高さメモリアルポールの建設と防災教育

—スマトラ沖地震・津波大災害3周年—

京都大学大学院教授 フェロー会員 家村浩和

2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震・津波災害から3年が過ぎた。筆者はこの間、10回にわたってインドネシアバンダアチェ市を訪問し、メモリアルポールの建設プロジェクトを指導してきた。本稿はその報告である。

## バンダアチェ市における津波被害調査結果

インドネシアのスマトラ島北部のバンダアチェ市では、大津波により10万余人の犠牲者を出した。筆者らによるアンケート調査結果で、最も重要なのは、図1である。図中上段の数字は災害時の生存率、下段の( )内は、地震直後に避難できたと仮定したときの推定生存

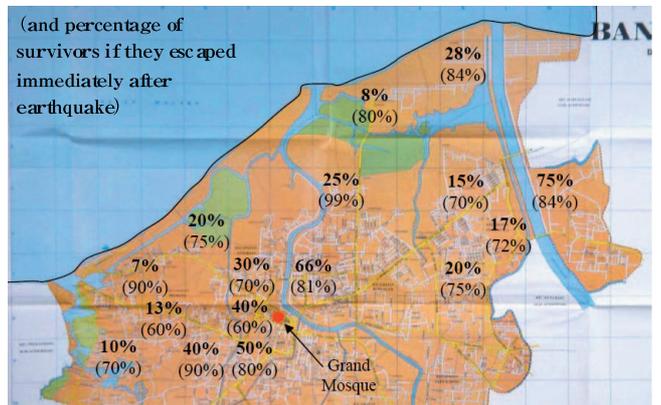


図1  
バンダアチェ市における津波被災者の生存率(カッコ内は地震直後に避難できたと仮定した値)

率である。地震直後に避難を開始しても、百パーセント助かるとは限らない。つまり、広い平坦地で、逃げられる場所がないのである。

## 津波高さポールを多数建設する意義と計画

大災害の記録と教訓を風化させずに長期間残すために、筆者は、津波高さのポールを、市内の学校やモスクの敷地あるいは主な道路に沿っ



写真1 津波ポールの建設例(左より杉本さん、家村、タンタウイ教授)



写真2 ポールを使った防災教育の風景

てできるだけ多数建設することを提案した。その意義は、津波高さの面的な分布を示す、避難の参考となる、毎日見るので津波に対する正確な警戒をもち続けられる、などである。ハザードマップの概念を現地で直接示すというメリットである。この建設計画は、ジャカルタの日本大使館の草の根運動資金を受けた現地NPOヤヤサンウミアバシア(シヤクワラ大学タンタウイ教授代表)により進められた。写真1は、国際援助により建設された学校の前に建設したメモリアルポールである。

## 防災教育への活用

津波ポールの下部のプレートに、津波が地震後何分での方向から来襲したかの情報を書き込んだ。このポールを使って地震、津波の発生

メカニズムや避難方法などの防災教育を進めた。写真2は、現地の高校生を対象として教育を進めているところである。建設ポール数は、高さ1mの低いものから、9mの高いものまで、合計85本である。配置図とそれぞれの様子を写真3に示した。この写真の拡大版を建設した地点の関係者に配布し、それぞれの相互関係を明確にして理解が進むようにした。このプロジェクトがバンダアチェ市の将来の安全性に寄与することを願う次第である。

本プロジェクトを進めるにあたってご協力いただいたシヤクワラ大学アグサリム教授、日本大使館(当時)杉本めぐみ氏、元バンダアチェ市長のサヌシアハップ氏、同令嬢ウィーナさん、ポストドクのムリヨウ・ハリス、プラド博士など関係者に深謝する次第である。

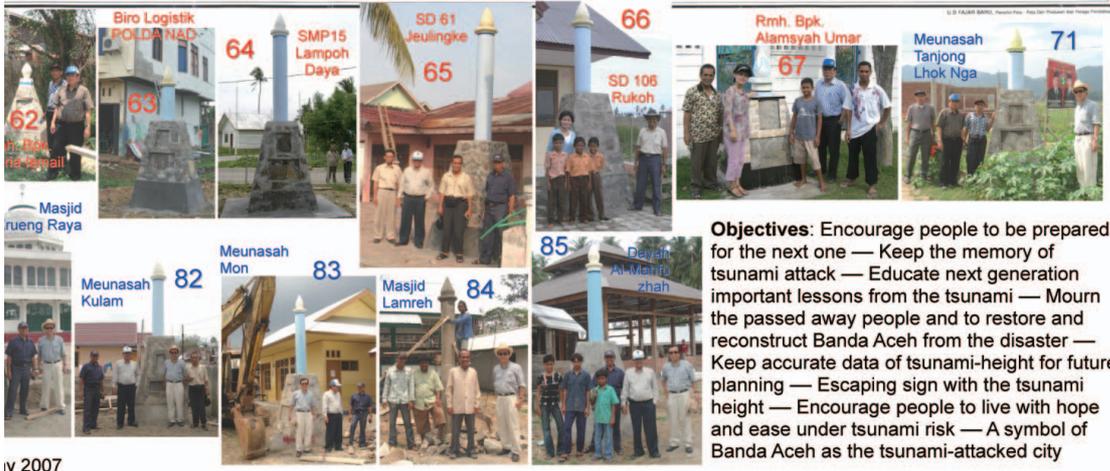
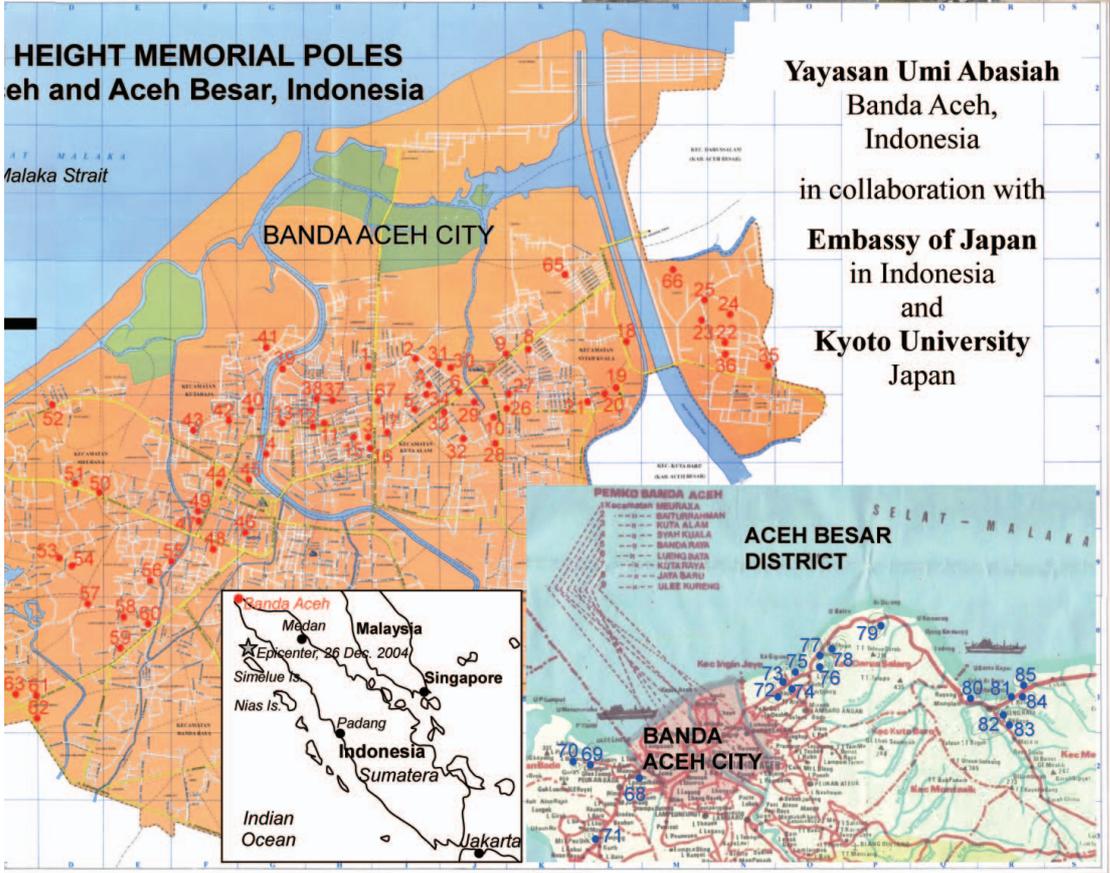




写真3 ポールの配置図とそれぞれの様子

List of Poles (Number, Inundation height\*, Distance from shore, Location\*\*) 07 May 2007